鏡二題

長谷川時雨

青空文庫

暗い鏡

鏡といふものをちやんと見るやうになつたのは、十八――九の年頃だつたと思ひます。その前だとて見ましたが、鏡にうつる自分を――まだそのころだとて顔だけですが――見たといへませう。十七位の時分は寧ろ姿全體にうつるもの――姿見鏡でなくつても、硝子戸なんぞでも氣まりが惡かつたので見ないふりをして、その癖誰も見るものがないとしげしげと見詰めたものです。どうも體のどこもが丸くなるのが――尻などが極立つて格好が惡くなつて厭でした。

鏡といへば、子供のころ家に新舊二樣の鏡があつて、どれを見ても心を暗くしたのを覺えてゐます。八十八の祖母は舊式でしたから箪笥のある部屋へ障子屏風をたてめぐらしてその中に鏡臺が飾つてあつて、鏡は丸い鋼の鏡――夏になるとよく磨師に磨かせてゐましたが、とにかく黒ずんだ、沈んだ顔が鏡の底の底の方に生氣なくうつるのでした。おまけに部屋が藏づくりでしたから、それに窓の青葉などに白い花でもついてゐる時は、妙に氣遠いといふ心持ちがして、美しくいへば、流れに沈んだ晝の月を見るやうだとか、又は深い井戸の底にうつつた顏のやうだとか形容も出來ませうが、その場合は狐つきぢやないかと自分の顏を悲しい凄いやうに眺めて、嫌な氣持ちがしたものでした。どうもあの銅の鏡は髪の色でもなんでも生々としたところがうつらないで陰氣です。そのかはりにまた、そのころの西洋鏡――硝子のときたらば粗製品で、どれにうつして見ても顏が違つてゐるのです。顏が半分歪んでゐたり、しやくれて見えたり、滑稽な泣きつ面をしたり、ほんとに嫌になつてしまふのが多かつたので、そんなものは見たくないやうな氣がして――子供だからそれほど分明不快だとは思はなかつたかもしれないが、まあそんな覺えがあります。

姿見は中々よく見ました。疊半分以上の、そのころのものではよい品があつたので、それに息をかけて拭きながら種々の表情をやりました。だが子供心に、妙なへだてをつけたもので、鏡は顏を見るものとしてで、姿見の前にくると別な氣分です。といふのは、あたしは踊りが大好きだつたので、お師匠さんなしの自由な踊りの稽古がたのしめたのです。いはばまあ、姿見が師匠なのでした。變なかたちをすると、「拙い」と叫ぶ、實に生まじめなもので、その聲は自分の聲とはしないのでした。

そこで、おとなになつてからのあたしは鏡にこすい對しようをすることを覺えました。一個の鏡を二ツに役にたてる。ある折はあらゆる自分の缺點さがしをやります、醜さのかぎりを探りだします。それは顏面といふだけではなく、心にまで觸れてゐます。もつとも多く鏡の前で考へます、自分自身の惱みについて――それは深刻なものです。いつもいつもがさうであるとはいひませんが、はじめから自分を睨めるやうにむかふ時もあれば、ふと髪を解く手も忘れて、ボーツとなつてゐる時もあります。前の方の時は惡どく現實的なをりです、後の折はやや空想的です。前の場合には眼は殘酷な秋官です、なさけ用捨もなく毛筋ほどのおもねりもありません、氣孔ひとつにも泣きたいほどの厭さがあつて、とてもたまらない不快な存在です。ぶちこはしてしまふことも出來ない粗製濫造品、自分だからといふので生かしつづけようとする矛盾さ――まあそんな疳癪です。

だが、またある折は化たつもりでだまかしておいて貰ひます。それではづかしげもなく人中へも出ます。化粧といふのは他目を賺すのではなく自分の心を化しなだめるのです。具合のいいことに化けようとしてゐる心は、都合よく賺されることに努力します。うぬぼれない自己満足――自分をだましてゐればよいていどで、なるべく手早く、痛いところに觸れない速力で髪も結ひます、化粧もします。

あたしは他人に髪を結つてもらふのが大厭ひです。ひとつは潔癖からもくるのですが、凝と鏡を見詰めてゐる間が長くて耐へられなくなります。何時も美しいなあと思へて鏡にむかつたらば、鏡は愛らしくもあり、親しみもありませうが――我影を見る親しみはもちながら、なんとなく怖い氣がします。それは年齢が更けてゆくといふ戰きばかりではありません。それらのことは面影に、鏡に見出すより早く氣づいて、却て驚いて鏡を見直すくらゐデリカなものです。

（「婦人公論」昭和四年）

女と鏡

ある折は、水をのんだコツプにうつる生々した愉快な顔――切子の壺に種々な角度からうつるのも面白い。さし出された給仕盆にうつることもあり、水面にうつして妙な顔をして見ることもある。食べものを運ぶホークに、二本の筋のある斷片的な鼻と口とがうつり、歯が光ることがある。それより面白いのは小さな匙に、透明な液體とともに掬ひあげた小人の自分の顔。どれもあんまり美しいものではない。しかし、ものを書きつづけた夜の顔が、朝の光りに、机や窓硝子にうつつた時のあじきなさは、シヨーウインドに突然くたびれた全身を映照しだされたをりの物恥と匹敵する。

私もよい鏡を持ちたいと思つた事もあつたが、それは趣味の時もあり、心の守りといふふうに思つたをりもある。今日の考へでは、脂粉のいらぬ年齢になつても、正しく恥ない日日を送るために入用だと思つてゐる。我心の正邪を、はつきりと、心の窓の眼から覗くことが出來るのは、凡人には鏡が手近だから――

（「婦人公論」昭和十一年四月號）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社
1939（昭和14）年2月10日発行
初出：暗い鏡「婦人公論」
1929（昭和4）年
女と鏡「婦人公論」
1936（昭和11）年4月号
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2009年1月17日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鏡二題

長谷川時雨

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/